（1面から続く）

当時の桜の名所である吉野にちなんで吉野桜と云われていましたが、吉野桜は山桜なので、当時の博物局の調査官・藤野寄命が発祥地の名をとって染井吉野と命名したといわれています。

明治十八年、十九年頃の話です。では、染井吉野が最初に岩國の地に植えられたのはいつなのでしょうか…。

江戸時代が終焉する幕末の動乱期に活躍した第十二代藩主経幹公が逝去され、続いて一八六八年に第十三代経健公が藩主となられ、時代は明治を迎えます。

明治もまた激動の時代で、版籍奉還により藩知事になられた経健公は明治四年の廃藩置県で免官となり、大名家に列する吉川家の皆様は東京に居住されることになります。

明治に至るまで藩の行政が行われた藩邸、そして広大な庭園領地は家令の方々に管理が託されることになりますが、主無き後の藩邸は荒廃が進み、御当主経健公のご意向を受けた家令の下、連城は吉香公園の公園計画を立案し、着手致します。

明治十七年、東京の経健公から二百本の桜の苗木が届けられ、岩国の地に初めて染井吉野が植えられます。

実は、この時植えられた桜が老木となって今も公園内に現存しています。

その後、現在の観光協会の前身である「保勝会」が設立され、桜を筆頭に、多くの花樹が植えられ、吉香公園は四季折々に美しい情景を私達に届けてくれる素晴らしい公園へと姿を整えてゆきます。

では、錦川の護岸流域の桜はと申しますと、もう少し時代が下がり、大正から昭和を迎えて植えられたものです。

一九二九年十月、米国の株価大暴落に始まる大恐慌によって日本の経済も影響を受け、昭和の大恐慌と云われる時代を迎えます。多くの人が仕事を失い、食べ物にも事欠いた時代に、国、県、町村では失業対策の一つとして公共事業が行われ、岩国の地では錦川流域の土手の整備が大々的になされました。

横山の土手はこの事業によって川寄りに築かれました。古い土手は公園側にありましたが、その名残は今はもうありません。

土手が築かれた当時、横山の土手沿いは河原町といい、対岸の錦見側は土手町といわれていたようです。

その後、土手沿いに桜が植えられ、今の桜並木が誕生致します。

現在、横山一帯の桜はかなりの花木が高齢化しています。

染井吉野は成育が早く、美しい花を咲かせますが、樹齢が短い桜木といわれています。

美しい錦帯橋と桜を後世に残して継承して行くためには経健公ゆかりの老桜もしっかりと護りながら、若い苗木を植えていくことが必要です。それは今、私達の使命だと思います。

家族回帰へ舵を切れ

エドワーズ・博美

健全な社会と家族の再生を目指して活動する「アメリカ価値研究所」というシンクタンクがニューヨークにある。

研究所の調査によると、現在アメリカでは4人に一人の思春期の青年が生産的な大人になれず、9歳から17歳までの子供たちの5人に一人が、なんらかの精神病か麻薬、アルコール中毒で苦しんでいるという。

こうした子供たちが抱える問題に対処するために、専門家が叡智を結集し、調査結果をまとめて2003年に発表した。アメリカが抱える問題は、遅かれ早かれ日本にも深刻な陰を落とすことは確実で、そうした意味からもこの調査は傾聴に値する。

「Hardwiredtoconnect」と題するこの小冊子の中で、専門家は種々の脳科学や行動科学の研究を集積した結果、人には生まれながらに結びつきやつながりを求める性格があり、このつながりには2種類あり、一つは人とのつながりであり、もう一つは人生における道徳的意味とのつながりであり、自分を超越した精神的何かとのつながりである、という結論を導き出した。

前者の人とのつながりに関しては、乳幼児期における愛着関係の構築の大切さを一番に挙げている。

言葉を発しない前からの乳児においてさえ、親との感情的コミュニケーションが大切であり、子供は話しかけられるから話すようになり、愛されるから愛するようになるという。

さらに、昔から「三つ子の魂百まで」と言われているように、3歳までに構築された親との愛着関係が、その後の子供の発達に多大な影響を与え、こうした愛着関係構築があるからこそ、子供は親の望みに応えようと努力し、その過程で道徳心が芽生えるという。

後者の道徳的意味とのつながり、自分を超越した精神的何かとのつながりとは一体何を意味するのだろう。人は秩序を求めるといった欲求が深層にあるからこそ、「人生の目的」や「自分が生まれた意味」を常に希求する。それゆえ、子供たちのそうした欲求に応えてあげることが必要であり、そのためにも宗教や信仰心といった精神性を満たすべきであるという。

今までの日本では自然や先祖に対する畏敬の念をもつことで、こうした精神性や「自分を超越した精神的何か」とのつながりが満たされてきた。

神仏や先祖に手を合わせることで、暗黙のうちに子供たちは世の中に秩序があることを学び、それから生じる安心感が子供たちにとって心理的メリットになるのだ。

こうしてみると、戦後、核家族化が進み、親子関係が希薄になって、地域とのつながりが薄れ、子供は人とのつながりよりも、機械相手にゲームをして時間を過ごすようになり、家から仏壇や神棚が消え、その挙句、子供たちや社会が急速に病んできたことにも頷ける。

調査は子供たちが置かれた危機状態を改善するためには「権威ある社会」を構築する必要があると説く。

そして「権威ある社会を作るには権威ある家族や親を作る必要がある」と指摘し、権威ある親とは「愛情にあふれて温かく子供を養育する一方で、厳しく子供を指導でき、子供を抑制でき、子供がすべきことをちゃんと教えられる親である」と定義している。

昔はどこの家でも見られた、優しく愛情いっぱいの母親に厳しい父親、それが今求められているのだ。

さらに「権威ある社会」に求められる特徴を次のように説明している。

※尊敬に値する大人と温かい養育関係の築ける集団である。

※子供を抑制でき、子供がすべきことを的確に指導できる集団である。

※何世代もの人が参加する集団である。

※信頼関係に基づく、将来を見据えた持続的な関係が築ける集団である。

※善悪の基準が示せて、道徳的行動が助長できる集団である。

※子供たちが必要とする宗教性や精神的発達を助長できる集団である…等

言わば、今、アメリカの学者が子供にとって必要と訴えている「権威ある社会」とはまさしく日本の伝統的家族制度そのものであり、昔の日本ではあちこちで見られた地域とのつながりではないだろうか。

今、アメリカでは家族や社会の見直しが始まっている。日本も今一度、戦後置き去りにしてきた素晴らしい家族制度と地域のつながりを見直し、手遅れになる前に家族回帰に向けて大きく舵を切るべきである。

（筆者は、米岩国基地内メリーランド州立大学講師）